

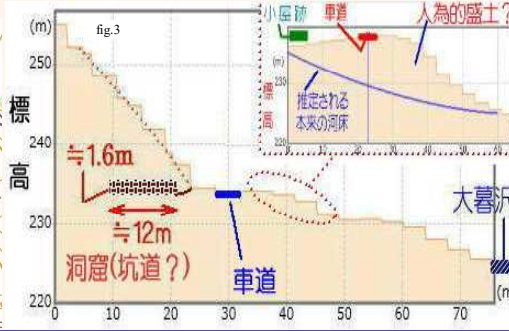
大沼浮島の探究2021-なぜ人々はここに来たか

県立山形中央高等学校 文理科学部 2年 矢作敦泰 鏡遙斗 高橋孝祈 丹野堅心

1 はじめに: 朝日町大沼・大暮山地区は山形市の西北西23km、標高306mに位置する。私達は2010年より環境や地史の研究を行ってきた。ここは発見された白鳳9年、街道や町より遠く、発見者とされる役小角・役覚道はなぜここに来たかは当初からの疑問であった。2016年「古代大沼湖仮説」の一端で仮湖底と判断した大沼の北東900mに位置する大暮山地区を訪れ、道端に入口が塞がれつつある洞窟・作業小屋跡・地図では下にもう一軒の小屋跡、河床に多量の金属酸化物を見だし、以後立地から大暮山経済を支えた鉱洞と仮定し、140余の資料をpdfにして集めてきた。私達はこれを立証するため現地調査・資料分析・取材から調べまとめることとした。



2 洞窟の位置と構造



2 大暮山・大沼の歴史

- 1) 旧石器時代後期の大隅遺跡が近く人が住んでいた
- 2) 縄文中期大暮山に人がいた(堤・水源を持つ屋敷? 跡)
- 3) 縄文後期・地区全体にあまり人がいなかった。(鉄滓出土)
- 4) 天武天皇勅命で役小角が朝日嶽登頂の折立ち寄った (単なる登頂ルートからは外れている)
- 5) 小角は大暮山方面から梵字の木片が流れ来ることで、大暮山・大沼を知る(小角以前から大陸文化があった)。
- 6) 小角の弟子・覚道が大沼浮嶋稲荷神社建立
- 7) 頼朝・大江・家光・義光の庇護を受け、「沈まない島」として漁業関係者から厚い信仰を受けた。

5 聞き取り調査より

- 1) 洞窟は戦後まもなく地元農政会有志で掘った野菜保存穴であった。小屋跡は作業小屋跡であった。
- 2) 下の小屋跡は、鉱泉浴場跡であった。
- 3) 小屋跡前の盛り土は、1975年8月豪雨により崩れた土砂を、谷川の水を暗渠排水した上に捨てたものであった。
- 4) 周囲はベントナイト質で、鉱山はあまり見かけない
- 5) 水銀ではなかったが、大沼大行院文書に宝暦9年8月、尾花沢(延沢銀山?)より来た人が村人10名雇い銀山試掘を行ったとあった。
- 6) 村の山奥に孤立している松程や小清の小集落に話が及ぶと、長井の五所神社から古寺鉱泉・月山・鳥海山の修験者達の話が数多くお聞きできた。
- 7) 村は古来仏教で、宿坊は営まなかった。

3 水銀と大沼地区の地質

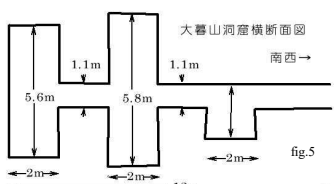
- 1) 役小角の出自は賀茂氏で水銀に関わっていた。
- 2) 中国・朝鮮には需要を賄うほど産しなかったためか、水銀は魏志倭人伝の頃より主要な朝貢品であった。煉丹や鍍金材料として日本中探索しており、大宝律令(701)にも鉱業に関わる太政官のお触れがあった。
- 3) 水銀鉱の辰砂は150~200℃で分解・昇華するため一般的鉱脈と異なり、砂鉱床として鉱脈から離れて小規模に産する。大暮山の洞窟は鉱脈が見いだせず、鉱山であれば水銀であった可能性が考えられた。
- 4) 洞窟下部の沢はズリのような盛り土で埋まっていた。
- 5) 洞窟の下13mを流れる大暮沢河床は金属酸化物で赤褐色~濃褐色を呈していた。
- 6) 地区は200~400ppbの比較的多い水銀を含んでいた

6 まとめ: この地区に人々を集めた要因が水銀であった可能性は薄まった。

しかし小角らが梵字により訪れた記述や鉄滓の出土、縄文中期の遺跡などから、渡来民を引きつける何らかの要素がこの村にあったと考えられた。また大暮山地区・松程・小清は多数の宿坊をもつ大沼地区から六十里街道や尾根駆けしない場合の古寺鉱泉への途上であり、朝日嶽や出羽三山信仰の参詣人や修験者を支えていたと考えた。古寺鉱泉は大朝日岳に日帰り可能な位置にあり、朝日信仰の本拠地であった長井方面に抜けることもできた。尚、この地区は村全体が地すべりに遭ったり(1875)大火で歴史的資料が散逸している。今後とも失われた歴史を補充していきたいと考えています。

4 今年度現地調査結果

レーザー距離計で測定した結果、洞内は直方体に部屋分けされており、鉱山だった可能性が薄まった。



参考文献: 大沼大行院文書・昭和新田遺跡発掘調査報告書・水銀の外国貿易国内産出と産業発達との関係・中国史に見る水銀・日本の貿易史-Wikipedia・朝日の歴史はじめ、インターネットで集めた140余の文献・記事